

講義「生活科教育法」の構築

井上 雅夫*・天木 桂子**

(1993年12月8日受理)

Masao INOUE and Keiko AMAKI

An Idea on Teaching Methods for "Seikatu-ka"

本論文は「生活科教育法」の講義構築の理念と講義内容を述べたものである。新教科「生活科」の登場に対応して初めて開講されることになった「生活科教育法」は、2名の家政科教官と1名の理科教官が担当した。家政科教官には、低学年家庭科としての意味を生活科に持たせたいとの願いがあり、その願いを込めた講義内容が展開された。一方、理科教官は、従来の低学年理科との関係も考慮しないわけではなかったが、家政科教官の講義内容とのつながりに気をくばりながら、低学年理科とは異なる新しい教科として生活科をとらえる講義を展開した。3名の担当教官の協力で作った新授業科目は輪講（オムニバス）形式の講義よりはるかによい講義内容になり得たと考えられる。

〔キーワード〕 教科教育、生活科教育、大学教育

はじめに

岩手大学教育学部では、生活科に関する授業科目として「生活科概論」と「生活科教育法」（それぞれ半年間2単位）を開講している。正規の講義が開設された時期は、「生活科概論」が平成3年度後期、「生活科教育法」がそれから1年後の平成4年度後期であった。「生活科教育法」は、教材研究に関わる内容をやるということで、社会科・理科・家政科の教官が担当することになった。現在は、前期を社会科と家政科が、後期を理科と家政科が担当している。すなわち「生活科教育法」の講義は理科教官と家政科教官の組み合わせで開始された。講義担当順は次のようであった。長澤由喜子（家政科）2コマ、天木桂子（家政科）2コマ、井上雅夫（理科）9コマ、合計13コマ（1コマは1時間30分）である。各時間のテーマを第1表に示す。各担当者は、これまで主として次のような分野で学部教育に携わってきた。長澤は家庭科教育と住居学、天木は被服管理学、井上は理科教育である。

本論文は、初めての授業科目に多少の戸惑いは感じながらも、担当者が講義をどのように構築していったかを、3人の担当者のうち井上と天木が述べるものである。

* 岩手大学教育学部理科

** 岩手大学教育学部家政科

1 講義内容

第1表 講義のテーマ

第1回 (1992年10月9日)	生活科年間指導計画の構想, わたしの生き立ち
第2回 (10月16日)	基本的生活習慣 (とくに健康安全)
第3回 (10月30日)	わたしのしごと
第4回 (11月6日)	買い物をしよう
第5回 (11月13日)	わたしのかぞく
第6回 (11月20日)	祭り
第7回 (11月27日)	受講学生の質問に答える
第8回 (12月4日)	凧上げ
第9回 (12月11日)	差別
第10回 (12月18日)	基本的生活習慣 (とくに礼儀作法)
第11回 (1993年1月22日)	季節変化への気付き
第12回 (1月29日)	自分自身や自分の生活について
第13回 (2月5日)	教育課程における生活科の位置付け

1 家政科教官担当分

1-1 講義を行うに当たって

現在, 小学校における家庭科は, 5, 6年のみに設定されている。しかし, 家庭科教師としては, 従来より小学校低学年からの家庭科導入の必要性を考慮しており, 日本家庭科教育学会, 教大協家庭科部門などが, あらゆる方面へその設置を訴えてきた。その意味で今回登場した生活科は, われわれとしても, こうした経緯の中で非常に重要な機会ととらえており, 家庭科の全学年設置に向けての足がかりとなることを期待している。ただし, 必ずしも全学年に家庭科という教科を設置するという意味ではなく, 家庭科の内容が学習できる教科があればよいというのが筆者の考えで, 生活科もその一つととらえている。

このような考えを基本としながら, 筆者らは, 家庭科としてどこまで生活科に踏み込めるか, 従来の社会的な内容と理学的内容との関連をどうはかるか, 低学年の児童にふさわしい内容は何かを模索することから始めた。

その結果, 生まれた時に最初に出会い, 人をとりまく最も基本的である, そして何より5, 6学年の家庭科の内容であり, 家政学の一分野でもある「家族」に視点を置き, 家庭生活を出発点として講義を始めることにした。そしてさらに, 家庭生活から学校生活, 社会生活への広がり, つながり方を考慮した講義へ発展させて行くことを企図した。

児童の属する家族の形態は児童めいめいについて異なっている。各人についてバラバラな内容を一つの教室で扱うのはかなり難しいこと, また, きわめてプライベートなことであり, 触れられたくないと考えている児童もいるため, 教師としては慎重に扱わなくてはならない部分であることを考慮した教材選択を心がけた。また, 指導にあたっては, 各家

